

旅と切っても切れない名門ブランドの歴史をひもとく

グッチの旅名品伝説は 優雅なるジエツトセッターと ともに誕生した

空の旅がまだ、特別な人々——特権階級、文化人、成功を収めたセレブリティ——のものだった時代、とびきりお洒落な元祖ジエツトセッターたちはこそ、グッチを愛用したのです。

時代を超えて人々の記憶に輝き続ける '60~'70年代のジエツトセッター・スタイル

文・中野香織(エッセイスト・服飾史家)

スタイルとは何でしょうか。永遠の課題であり、百人百様の定義がありますが、たとえば、グッチの現クリエイティブ・ディレクターであるフリーダ・ジャンニーニは、このように表現します。

「私にとってスタイルとは、一つの印象を残すことに尽きる」(「ウォール・ストリート・ジャーナル」2012年2月24日)

心に強く刻みつけられる、一つの忘れがたい印象。よかれあしかれ、それを残すことができる人が「スタイルのある人」と呼ばれる資格があるとするならば、1960年代から70年代にかけて「ジエツト・セット」と呼ばれた人々には、明確なスタイルがありました。

パリ、ローマ、ロスの空港を、

ただ一夜のパーティーのために移動するビューティフル・ピープル。艶やかな自信に満ちてクールに寛いだジエツト・セットのスタイルをつくり上げていた要素は、毛皮のコートやサンガラスとともに、遠目にもわかる緑・赤・緑のウエブストラップが施されたグッチのラゲージでした。

当時のジエツト・セットのアイコン的存在に、スウェーデン出身のブリット・エクランドがいます。結婚したばかりのピーター・セラースとローマに到着した時、たくさんグッチのラゲージと一緒にした。彼女は当時を回想します。「旅行するためにおしゃれをして、



Photo by Popoport / Getty Images



Photo by Agneta

空の旅もグッチも
選ばれた者だけに許された
エクスクルーシブだった

写真右/'60年代のグッチのローマショップで、ウェブ柄スーツケースを選ぶジョン・ウェイン。写真左/'70年撮影。ピーター・セラースと当時の妻の空港でのショット。愛用のハーフムーンバッグと両手にボストンの、グッチ。3個持ちに注目！



Photo by Popphoto / Getty Images

’60～’70年代のセレブの
ジェットセット・スタイルを
世界中が羨望した

写真右／ギリシアの海運王と再婚後のジャッキー。ロンドン、パリ、N.Y.をはじめ世界各国を飛び回る、まさにジェットセッターの先駆け。『ジャッキーバッグ』はいつも旅のお供だった。写真左／ロンドンの空港にて、ウェブ柄ボストンを手にしたリンゴ・スターと妻。



Photo by Ron Galella

飛行機の中でタバコをくゆらし、私の三匹のヨークシャーテリアはキャビンで私と一緒にいたの。すべてが大きなパーティーのような感じだ。いつも持ち歩いてきたグリーンとレッドのウェブストラップがついたブラウンのゴージャスなレザーのビュティケーケースは、とても快適な足乗せ台にもなっていたわ！(サラ・ムーア著『GUCCI BY GUCCI』)

ボンドガールにもなった彼女は、ビーター・セラーズと離婚後、ロッド・スチュアートとともに世界を飛び回りますが、豹柄のパンツスーツにグッチのハンドバッグという姿で、パパラッチに撮られたりしています。

そんな放浪(ほうろう)な旅と名声と恋愛に彩られたジェット・セットの生活と、常にとともにあったのが、グッチのラゲージなのですが、ではなぜ彼らはグッチを選んだのでしょうか？

きっかけのひとつは、グッチがローマにあったから。創設者グッチオ・グッチの長男、アルド・グッチは、フィレンツェの本店に続き、ローマに2店目をオープンしました。なぜローマが重要だったのかと言えば、映画撮影所チネチッタがあったからです。

第二次大戦後、アメリカは好景気に沸き、映画の製作費も高騰します。ゆえに、ハリウッドのスタ

ジオよりも安く効果的に仕事ができるローマのチネチッタで、多くの撮影が行われるようになります。映画スターが大挙してローマにやってきます。とりまきも集まります。当然、ロマンスやスキヤンダルが生まれ、それを撮るパパラッチが誕生します。町全体が、「テベレ川のハリウッド」と化していきます。退廃的な日々とパパラッチや貴族とスターの終わりのなきナイトライフを描いた、フェリーニの『甘い生活』(60年)は、まさに当時の記録映画です。

パパラッチを意識しつつ、世界中の都市やリゾートをジェットで飛び回るセレブリティが、仕事用に、そして社交にと必要としたのが、シックで上品かつ遠目にも別格とわかる高品質のバッグでした。その要望にこたえたのが、グッチの製品だったのです。「価格が忘れられても、品質は長く記憶に残る」とアルドが誇るクオリティもさることながら、乗馬の世界のモチーフは、有閑階級のスポーツを連想させ、上流イメージとして申し分ないものだったのです。

羨望(せんぼう)と憧れの視線を十二分に意識しながら、人生の快楽を享受すべく飛び回ったジェット・セットパパラッチが残したその「スタイル」の記録には、今なお、セクシーで新鮮な胸騒ぎを覚えすにはいられません。